

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25301054

研究課題名(和文)聴覚障害児のためのコ・エンロールメント教育プログラム開発に関する海外調査研究

研究課題名(英文)A survey on the co-enrollment programs for deaf and hard-of-hearing pupils

研究代表者

鳥越 隆士 (TORIGOE, TAKASHI)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：10183881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、聴覚障害児童のためのコ・エンロールメント教育プログラム(通常学級で聴児と聴覚障害児が共に学び、手話と音声言語の活用し、チームティーチングによる指導)のに関する海外調査を行った。具体的には、米国、イタリア、ノルウェー、香港の小学校でフィールド調査を行い、教室における手話と音声言語のバイリンガル状況、児童間のコミュニケーション、教員による支援、教員研修、学校マネジメントなど、教育実践の構築の在り方を記述した。分析の結果、2つのタイプ：通訳重視型とチーム指導重視型、があることが分かった。本調査の成果に基づき、日本の小学校でのプログラム開発の可能性の検証も行った。

研究成果の概要(英文)：I described the co-enrollment programs for deaf and hard-of-hearing (DHH) pupils in Norway, Italy, USA and Hong Kong and clarify their characteristics and conditions, focusing on bilingual situation in the classrooms, the relationship between signed and spoken languages, the cooperation between teachers and/or interpreters, the interaction between hearing and DHH pupils. I found there were two types: interpretation-prominent, and co-teach prominent. Based on the results, I finally discussed about the possible inclusive practices for DHH in Japan.

研究分野：社会科学、特に特別支援教育

キーワード：聴覚障害児童 インクルージョン コ・エンロールメント 手話 文化的実践

1. 研究開始当初の背景

(1) 聴覚障害児教育が大きく変化してきた。1 つには、手話の活用が挙げられる。長い間手話はろう教育から排除されてきたが、近年、手話の社会的認知が進み、学校でも教育言語の1つとして手話を活用する取組が進められつつある。2 つには、通常の学校や学級で教育を受ける聴覚障害児童の増加である。その背景には、人工内耳等、補聴機器・技術の発展により、聴覚活用の可能性が格段に広がってきたことがある。ただ聴覚障害児はコミュニケーション等、他の障害児と異なるニーズがあり、必ずしもインクルーシブな教育環境が適切とは言えないことやそのことがもたらす様々な課題について議論されてきた。

(2) 近年、欧米で聴覚障害児へのインクルーシブ実践の新たな取組としてコ・エンrollment (co-enrollment) が試みられつつある。教室に聴児と聴覚障害児がともにいること (しかも聴覚障害児が複数人数)、聴児と聴覚障害児の相互のコミュニケーションに十分な配慮がなされていること、そのために手話環境が整備されていること、通常の学級の教師と聴覚障害教育専門の教師が協働的に関わっていることなどがその特徴として挙げられる。いわば、教室環境が聴覚障害児にとってインクルーシブでありながら、同時に手話と音声言語のバイリンガル教育実践がなされる試みと言える。その成果について、断片的ながら肯定的な報告がなされつつある。聴覚障害児のための新たな教育モデルとして、検討を行うことが求められている。

2. 研究の目的

本研究では、欧米等での先進的な事例について調査をすることが目的である。具体的には、米国、イタリア、ノルウェー、香港の小学校でフィールド調査を行い、プログラム開発・実践のための諸条件を明らかにする。特に、教室における手話と音声言語のバイリンガル状況、児童間のコミュニケーションの様相、教員による支援、教員研修、学校マネジメントなど、教育実践の構築の在り方を記述する。またこれらの成果を踏まえ、日本の現状に合う聴覚障害児のためのインクルーシブな教育実践の在り方を検討する。

3. 研究の方法

(1) 対象校 4校 (詳細については成果のところに記す)。

(2) 手続き 授業観察及び担当者へのインタビューを行った。できるだけ詳細な記述的資料を得、仮説構成的な観点から質的に分析を行った。

4. 研究成果

(1) コ・エンrollment・プログラムについて、研究者の間でおおよそ共有されている

定義がある。1 つには、聴覚障害児と健聴児が同じ教室で学ぶこと、2 つには、聴覚障害児は一人でなく、複数名在籍していて集団を形成していること、3 つには、通常学級の担任 (あるいは教科担任) と聴覚障害専門の先生がともに関わること、4 つには、聴覚障害児の手話学習、手話使用が保障されていて、先生が手話を使ったり、手話通訳者が配置されたりしていること (教室がバイリンガルになっていること)、5 つには健聴児も手話を学習していて、健聴児と聴覚障害児が直接コミュニケーションをとれるように配慮されていること、である。以下、コ・エンrollmentの教室を訪れ、どのように聴覚障害児たちと健聴児と一緒に学びを形成しているのか、お互いのコミュニケーションや関わりはどのようなのか、そのためにどのように先生たちが協力し合っているのか、教室で手話と音声言語がどのように関係しているのかについて、さらにはそれでも存在し続けている困難や課題について、紹介する。

(2) ノルウェー

ノルウェーは、スウェーデンやデンマークに少し遅れ、1990年代にろう学校でのバイリンガル教育が開始された。1990年代は同時に、人工内耳が北欧でも爆発的に広がった時代で、ノルウェーはもともとインクルーシブな取組が昔から行われていたこともあり、ろう学校に在籍する子どもたちが激減していた。

ろう学校で手話を使ってバイリンガルに教育しようという取組とろう学校が縮小していった中で、インクルーシブで、なおかつバイリンガルである取組が始まった。場所はネードレゴセンセンター。オスロから海岸沿いを西へ、車で1時間程のところにある小さな街、ホルムストランドにこのセンターがあった。各地にある国立障害児支援センターのうちの1つである。とても規模が小さく、在籍生徒数も10名まで減少していた。単独の学校として存続が危ぶまれる中、1つのプロジェクトが始まる。隣の地域の小学校も小規模校で、この二つの学校を統合しようと動き出した。当面、通常の学校にろう児 (先生と一緒に) が行って、健聴児と一緒に授業をうける取組が始まった。

比較的ろう児の数が多いい4年生の教室を中心に訪問し、子どもたちの学習の様子を見た。授業は、小学校の先生とろう学校の先生が共同で行う。小学校の担任の先生は、このプログラムがスタートする前に、大学で6か月間、手話の研修を受けたそうだ。生徒は全部で13人。うち聴覚障害児は3人 (女児2人、男児1人)。教室では先生二人が前に立つ。どちらかがメイン、もう一人がサブで、その都度交替しながら、授業を進めていた。ろう学校の先生だからと言って、ろう児だけを指導しているわけではなく、2人ともクラス全体に責任を持つ。小学校の先生がメインの時は、声だ

けでしゃべり、横でろう学校の先生が手話通訳を行う。ただ通訳だけに徹しているのではなく、必要な時は、声と手話を併用して、指導も行う。ろう学校の先生がメインの時は、手話と声を併用しながら、話をし、小学校の先生は、サブにまわり、きちんと話を聞いているかチェックしたり、教室をまわり巡回し、個別に指導を行っていた。

教科指導の多くの時間は、小グループ指導であった。3つか4つのグループに分かれて、それぞれ課題が与えられて、子ども同士、集団で話し合い、助け合いながら学習を進めていた。グループに聴覚障害児がいる場合、健聴児は何とか手話でコミュニケーションをとろうとしていた。健聴児に対する手話指導の時間は特にとっていないようであるが、先生によると、自然に手話を学んでいるとのこと。1学年、1学級の小規模の学校で、そのクラスはもう4年近く一緒にいるということ。ただ健聴児の手話のレベルは様々で、できるだけ手話のできる健聴児と聴覚障害児と一緒にいるように配慮しているとのこと。

実際の学習では興味深いエピソードが見られた。例えば、算数の時間、文章問題の解き方を考える課題。聴覚障害児のいるグループで、健聴児はいろんな工夫をしていた。しゃべりながら手話をしたり、他の健聴児の発言を手話通訳してあげたり、またまず声だけで発言して、その内容を自分で手話表現する子どももいた。手話単語がわからないときは、聴覚障害児にたずねることもあった。どうしてもわからないときは、先生に聞く。小グループ活動の時は、2人の先生は、各グループを巡回して、学習の様子を確認したり、アドバイスをしたりしていた。健聴児同士声だけで話をして、聴覚障害児が取り残されている場面も時にはあったが、その時はそっと内容を手話通訳したり、健聴児に手話も使うよう指示したりしていた。

ろう教師が日常的にこのクラスの学習に関わっていなかったが、ろう教師による特別授業を何回か観察した。ろう学校のろう教師と小学校の健聴の先生の2人で担当。ろう教師は手話だけで、その際は、小学校の先生が手話通訳していた。小学校の先生が話すときは、手話と声を併用。ただいくつか難しい局面も見られた。例えば、健聴児がろう教師に話そうとするとき、初めは手話を使おうとするが、難しくなると、だんだん声だけになった。ろう教師も何とか直接子どもの話を聞こうと、口型を見て（読話も駆使して）内容を理解しようとした。でもその時、他の聴覚障害児たちは十分の情報が得られず、対話から取り残されていることがうかがえた。また小学校の先生が声と手話で話していて、それに対して、健聴児が次々に声だけで質問したり、コメントしたりすることもあった。その時、健聴の先生は、それに答えつつ、また全体を通訳することが必要で、加重の負担になって

いることがうかがえた。逆の場合、すなわち、ろう教師と聴覚障害児が手話だけで話が進んでいき、健聴の先生が通訳が十分でなく、手話があまり得意でない健聴児が話題から取り残されてしまっていた。健聴の先生は、手話の研修を受けたにせよ、手話通訳の技能が十分でなく、また手話通訳と教師の二重の役割を担っていた。

いずれにせよ、聴覚障害児たちは授業にフルに参加している印象を受けた。2人の先生も、この新たな取組をチャレンジングであるけれども、毎日ワクワクしながら実践を行っているとは肯定的に捉えていた。

2つの言語の関係は、非常に柔軟であった。ノルウェー語（音声）とノルウェー手話（声なし）、それに手話口話併用の方法が、臨機応変に交替していた。また、健聴児や健聴の先生は、聴覚障害児と直接手話でコミュニケーションをとろうと努めていた。手話も聴覚障害児もともにクラスにとって大切であるとの雰囲気醸成されていた。手話はろう者のもの、自分たちには関係ないというのではなく、最終的には通訳の助けを借りるにしても、なんとかできる範囲で（時には口話併用でも）、直接話し、関わろうとすることは、学習が社会的に進んでいくことを考えると非常に大切なことと感じた。

(3)イタリア

イタリアでは、国を挙げてインクルーシブ教育が進められ、1970年代、すべての障害児のための学校が廃止され、障害児はすべて通常の学校に就学するようになった。そのような中で、ここコサト市で、新たな取組が始まった。聴覚障害児たちが近隣からこの学校に集められ、コ・エンロールメントクラスが作られた。このクラスでは、健聴児と聴覚障害児が共に学び、すべての授業に手話通訳が付けられている。さらにろう者の手話教師が採用され、定期的に各クラスにやってきて（週に3時間程度）、健聴児に対して手話の指導を行っている。

このプログラムは、この小学校だけでなく、近隣の幼稚園と中学校で共同運営されている。各学年概ね3から4クラスあるが、その中の1クラスだけがコ・エンロールメントクラスとされ、そこに聴覚障害児が集められている。従って、幼稚園から小学校、中学校と、12年間手話を継続して学ぶことができる。もちろん個人差はあるが、コ・エンロールメントクラスにいる健聴児もかなり手話ができる。

校長先生によると、健聴児の親たちもコ・エンロールメントクラスに子どもたちを入れたがっているそうだ。当初は、手話を学ぶことが健聴児たちにとって負担になるのではとも思われていたが、学力テストでこのクラスの生徒の成績が他の通常のクラスの生徒よりも良いということが分かったそうだ。健聴児にとって手話を学ぶことは、デメリッ

トよりもメリットがあるとのこと。聴覚障害児の取り出し指導では、読み書き指導や教科の補充指導だけでなく、手話指導も行われている。ろうの手話教師による高いレベルの手話指導が行われている（例えば、手話の文法に関することなど）。単なるコミュニケーションの手段ではなく、学習言語としてのレベルをめざしているとのことであった。

(4)米国

米国アリゾナ州にある小学校では、クラスのおよそ3分の1から4分の1が聴覚障害児である。この学校にはもともと難聴学級があったが、およそ20年前に学校全体で、コ・エンロールメント・プログラムを立ち上げた。この学校は、「実験」小学校といい、この地する域で様々な先進的なプログラムに取り組む学校と位置付けられている。聴覚障害児が多く在籍する他、異年齢集団での教育的な取組も行っていた。

クラスは、全部で6クラスあり、3つがコ・エンロールメント学級（聴覚障害児と健聴児がいる）、残りが通常の学級（健聴児のみ）であった。いずれも複学年学級で、プレ（幼稚園の最上級にあたります）1年生 2年生のクラス、1年生 2年生 3年生のクラス、3年生 4年生 5年生のクラスが構成されていた。コ・エンロールメントクラスはいずれも児童は30人ほど、そのうち、3分の1から4分の1が聴覚障害児。重度の聴覚障害を持ち、手話を主に使っている児童、人工内耳を装着し、かなり聴覚活用ができる児童、難聴の児童などが含まれていた。各クラスに先生は2人（通常教育の先生と聴覚障害専門の先生）。それに手話通訳者が各2人ずつ配置されていた。また聴覚障害教育専門の先生3人のうち、1人が聴覚障害をもつ先生であった。

朝の会やガラスミーティングなどでは、全員が1つの教室にいる。子どもたちが朝登校して、床に座って、おしゃべりをしている。その中で、手話でおしゃべりをしている集団もある。必ずしも聴覚障害児だけでなく、手話の得意な健聴児もそこにいる。聴覚障害教員もその手話の輪に入っている。もちろん聴覚障害児も健聴児と声でおしゃべりしている場合がある。朝の会の内容は、挨拶、1日の時間割の確認、連絡事項、算数と国語と手話の小学習など。日によって、通常教育の先生（健聴）と聴覚障害教育専門の先生（ろう）が主担当とサブ担当を交替する。健聴の先生が主担当の時、横に手話通訳がつき、サブのろう教師は後ろから子どもたちの様子を見ている（必要に応じて個別に指導）。主担当がろう教師の時は、アメリカ手話で子どもたちに話しかける。手話通訳者が後ろにいて、ろう教師の手話を声にする。健聴の先生も後ろにいて、個別にサポートする。ろう教師に対しては、みんな手話を使おうとする。子どもたちは特に手話を正式の学科として学習

しているわけではないが、毎日の関わりの中で、自然に学んでいるようだ。従って、健聴児の手話のレベルは様々（実は聴覚障害児も）。何とか手話でろう教師と話ができる子どももいるが、初めは何とか手話（と声）で話すも途中から声だけに替わる子どももいる。ろう教師は、子どもの手話と口の形を見ながら、理解しようとする。が、ちらちらと手話通訳の方を見て情報も得ている。初めから声だけで、ろう教師に話しかけようとする子どももいる。その時は、ろう教師は手話通訳者の方をさっと見て、子どもの発言が終わると、また手話でその子どもに話しかける。

教室はまさにバイリンガルの環境であった。手話（声つき、声なし）と音声英語が教室に常にあり、特に健聴児は、手話を使うことが推奨されつつも、無理のないように使い分けている。聴覚障害児にとっても、2つの言語が常にあるので、どちらか自分にとってわかりやすい方に注目している（表現に関しても同様）。

教科の学習では、いくつかのグループに分かれる。複学年クラスなので、学年ごとに分かれることもあるし、時に聴覚障害児だけがグループを形成することもあった。時にはろう教師が、健聴児だけのグループを教えていることもあった。いずれにせよ、常に教員の横に（ろう教師の場合は後ろに）手話通訳者がいた。ただ健聴者（児）はすべて手話通訳者に任せるのではなく、自ら直接ろう児（ろう教員）とコミュニケーションをとろうとしていた。

(5)香港

香港のコ・エンロールメント・プログラムの取組は、香港中文大学手話研究センターの強力な後押しで、進められていた。実施しているのは、1つの幼稚園と1つの小学校。このプログラムの特徴は、常にろう教師が教室にいること、そしてろう教師と健聴の先生がチームティーチを行っていることであった。また教室には手話通訳者はいない。

小学校では、各学年に数クラスある中、コ・エンロールメントクラスが1クラスあり、そこに聴覚障害児が数名いた。幼稚園でも同様で、3学年で各学年1クラスがコ・エンロールメントクラスになっていた。コ・エンロールメントクラスでは、健聴の先生とろう教師が教室の前に並び、チームティーチを行う。

1つ授業記録を示す。幼稚園の年長のクラス。2人の先生が教室の前で並んで座っている。子どもたちは半円状になって座っている。テーマは「夏休み」。まず健聴の先生が絵本を取り出し、表紙を見せ、「何だろう？」と問いかける。ほぼ同時にろう教師も、絵本の表紙を指さし、「なんだろう？」と手話で問いかける。子どもたちが、口々に、「山がある」「男の人がいる、お父さんかな？」と発言がある。健聴の先生が、その発言を手話も使って声で確認しながら、またホワイトボー

ドにその言葉を書いたりする。それを見て、ろう教師が、その発言を手話で表現し、それについて手話で話をする。「そう、お父さんかなあ。するとこの人はお母さんかなあ？」のように。次に、絵本の内容に入る。ページを1枚めくり、まずろう教師が、その絵の内容を手話で表現する。「夏休みで、家族みんな、田舎に行きます。バスがあるね・・・(などなど)」健聴の先生も声(時に手話併用)で子どもたちと対話をする。そのあと、ページに書いてある文(短い文)を指さしながら、音読する。子どもたちにも復唱させる。健聴の先生は、声を中心に、ところどころ手話を併用して話をする。子どもたちは、健聴の子どもは声を中心、聴覚障害児は手話だけだったり、声と手話を併用したりする。声だけの発言には、健聴の先生が、声と手話で発言を繰り返して、対話していく。そのため内容が聴覚障害者(児)にも共有される。手話だけの発言も、ろう教師が復唱して、対話を広げる。簡単な対話であれば、健聴児も手話が理解できるようだ。もうすでに2年間、このプログラムに参加しているので、手話もだいぶできるようになっている。特に学ぶべきキーワードが出てくると、まず手話で表現し、次に音声で発音し、さらに文字で確認し、ということを繰り返していた。

この授業では、1つの言語の授業を別の言語に翻訳するというのではなく、2つの言語で同時に授業が進められていた(もちろん互いに関連しながら)。そのため、必ずしも発言が健聴児(者)と聴覚障害児(ろう者)の間で共有されないときもあった(例えば、同時に複数の健聴児が先生に向けて自発的に発言したとき、健聴の先生が通訳するわけではない、逆も同様)。それでも手話言語と音声言語がダイレクトにそれぞれ、その言語を使用する人たちに向けられ、その間で相互交渉が図られていた。もちろん言語間での共有のために、様々な手立てが使われていた(例えば、手話と音声を関連付けて覚えたり、子どもの声による発言を教師が手話と口話で併用して復唱したり)。

(6)2つのモデル、そして解決すべき課題

以上4つのコ・エンrollment・プログラムを示した。共通している特徴として、まず教室に2つの言語が存在していたこと、2つの言語の関連が柔軟であったこと、そして成人ろう者が関与していたことであった。

プログラムによる違いも見られた。それをチーム指導重視型と通訳重視型に分ける。ノルウェーと香港では、2人の先生が前に並んでチームティーチをしていた。米国では、2人の先生がクラスを担当していたが、指導場面では常に手話通訳者がいた。イタリアでも、先生の他、手話通訳者がいました。手話通訳という点では、米国、イタリアのプログラムでは、手話通訳者が教師と同様の重要な役割を担っていると言える。それに対して、ノル

ウェーと香港では、先生が時に手話通訳の役割を担うことはあったが、手話通訳者はいなかった。

同じコ・エンrollment・プログラムと言ってもその様相は大きく異なることが示された。それらは、その学校や社会の文化的な特質が大きく関連していることが想定される。日本ではどのようなモデルや形式が可能なのか?文化的、制度的、社会的な特徴を踏まえて検討する必要があることが示唆される。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

鳥越隆士「手話の活用とインクルーシブ教育の共存をめざして」手話・言語・コミュニケーション, 3号, 68-110頁, 2016年(査読なし)

[学会発表](計3件)

Torigoe, T. Co-enrollment programs for Deaf and Hard-of-Hearing children: A socio-cultural analysis. 13th Nordic Network of Disability Research, Bergen, 2015.5.

鳥越隆士 聴覚障害児のためのインクルーシブ教育とコミュニケーション支援: Co-enrollmentプログラムの取組から(大会準備委員会企画シンポジウム「特別支援教育の展望: インクルーシブ教育のめざすもの」) 日本教育心理学会第53回総会, 2014.11.

Torigoe, T. What are the 'Co-enrollment' practices? A comparison, Invited speech at Symposium on Sign Bilingualism and Deaf Education, Chinese University of Hong Kong, 2014.6.

6. 研究組織

(1)研究代表者

鳥越 隆士 (TORIGOE TAKASHI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 10183881

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし